

A 氏邸訪問記(2014.11.30)

1. はじめに

前回伺ったのは MYTEK DIGITAL 192-DSD を導入され、HQPlayer と MYTEK DIGITAL 192-DSD による DSD Native 再生や DA-3000 と MYTEK DIGITAL 192-DSD の SDIF 伝送も実施されておられたときでしたが、その後、アサヒステレオセンターにおける micro iDSD の試聴において micro iDSD による 126sDSD を超える DSD 音源の DSD Native 再生にも深い関心を寄せられていますので、今回 micro iDSD を持参し、M 谷氏、S 氏とともに A 氏邸のシステムで DSD がどのように鳴るか、聴かせていただくことにしました。

2. 試聴の経過

A 氏邸のスピーカーは、QUAD、Tannoy Arden、KEF の LS3/5a ですが、今回も上杉のプリアンプとパワーアンプで駆動されている QUAD を聴かせていただきました。これまでの経緯は過去の訪問記を参照してください。

<http://audiokenkyu.sakura.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2014/01/6e5a0f6fedef1d36b9e5234bd6e6a3bf.pdf>

<http://audiokenkyu.sakura.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2014/01/00348d1955e177f5440630a336febddd.pdf>

<http://audiokenkyu.sakura.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2014/01/289bb490820c1922c8c58fdf9131183c.pdf>



最初は A 氏の PC で HQPlayer の再生による MYTEK DIGITAL 192-DSD での 128sDSD 再生の現状確認ということで始まり、さらに CD から DSD へのリアルタイム再生へと進みました。HQPlayer と MYTEK DIGITAL 192-DSD の組み合わせの透明感があるのびのびとした音が出てきましたが、メンバーから QUAD でこんな低音が出るとは！という驚きの声がありました。これは EL34 パラプッシュの上杉アン

プのグリップの強さと QUAD の後ろにある TANNOY ARDEN の 38cm ウーファーがあたかもパッシブラジエーターのように働いているのではないかと推察されます。

次に持参した PC で同じく HQPlayer で再生し、USB リベラメンテで接続した micro iDSD のアナログ出力を DA-3000 に入力し、DA-3000 から SDIF 伝送で MYTEK DIGITAL 192-DSD に送るというルートでの DSD 再生に移りました。音源を入れた SD メモリーと可搬型の HDD から USB の A 型⇄B 型変換コネクタを介して USB リベラメンテで PC に入力し、512sDSD や 256sDSD および 192KHzWAV からのリアルタイム DSD 変換で聴いていただき、128s 超えの DSD の音質の特徴を確認していただきました。

ここで DA-3000 と MYTEK DIGITAL 192-DSD を経由しないで micro iDSD のアナログ出力を直接上杉プリに入れて聴きたいという声があがり、接続替えをしましたところ、DA-3000 と MYTEK DIGITAL 192-DSD 経由とあまり変わらないのではないかと、あるいは micro iDSD 単独使用の方がいいのではないかとという声でもありました。これは拙宅の結果と異なり、拙宅の場合、DA-3000 と MYTEK DIGITAL 192-DSD の SDIF 伝送のケーブルにデジタルリベラメンテを使用し、DA-3000 に外部クロックを入れていますので、こういった条件の違いによるものだと考えられます。

さらに SD メモリーを装着したメモリーリーダーから USB の A 型⇄B 型変換コネクタを介して USB リベラメンテで PC に入力しているのを、メモリーリーダーから PC への直結あるいは SD メモリーを直接 PC の SD メモリー入力スロットに入れて聴きたいという声が上がリ、先ほど A 氏が使われた SD メモリーに替えて、最初に USB リベラメンテを介して聴き、ついで USB リベラメンテを介さないで聴いてみましたところ、音の広がり感や奥行き感、ボーカルの声の張りみたいなものが USB リベラメンテを介した場合から後退し、改めて USB リベラメンテの効果を実感できました。この方法は先のオーディオセッション大阪でのインフラノイズのデモでも採用されていたものです。

次に A 氏邸の外付けドライブに USB リベラメンテで接続し CD の再生を 176.4KHzPCM と 256sDSD などへのリアルタイム DSD 変換で行いましたところ、CD からリアルタイム DSD 変換の効果を認めました。ここで USB リベラメンテを A 氏邸のオーディオグレードでない USB ケーブルに交換しますと、楽器や声の質感が後退します。そこで S 氏持参のフェライトコアのノイズフィルターで USB ケーブルに装着しますと、音が静かになりクオリティが USB リベラメンテに近づきました。再度 USB リベラメンテに戻してフェライトコアのノイズフィルターを装着してみますと、それ以上の改善は見られず、既に USB リベラメンテ自体にそういった手が尽くされているのではないかとコメントが出ました。

ここで USB 入力を打ち止めとし、Diga→CCV-5→micro iDSD の S/PDIF 入力での

DACの音を聴いてみることにしました。CCV-5にはGPS-777から96KHzでクロック入力を行い、リクロックをかけています。BS録画以外にもDVDからの録画の再生も行ったところA氏もこれらの音に満足そうで、メンバーからもこれは良いという声が上がりました。ライブ演奏の大画面TVの迫力と相まってQUADの音の良さを堪能することができました。

この間、令夫人の手料理をいただきながら銘酒の潤滑油も効いて、DSD再生やUSBリベラメンテ、micro iDSDやnano iDSD、iPhono、NASなどの話題も飛び出して議論が盛り上がりました。

3. まとめ

現在のA氏邸のシステムのポテンシャルの高さに加えて、①micro iDSDによるDSD Native再生の特徴、②HQPlayerとmicro iDSDによるCDからDSDへのリアルタイム変換再生の効果、③USBリベラメンテのポテンシャル、④DigaとGPSクロック入力とmicro iDSDのS/PDIF入力のDACの性能によるDiga再生での相乗効果などの確認ができました。

QUADは繊細であるが、音に力強さが出ない、DSDや音は柔らかいが、PCMに比べて押し出しや切れ込み感に欠けるといった一般の認識と違い、USBリベラメンテやクロック入力に助けられて迫力とクオリティが両立してQUADの本来のポテンシャルがDSD再生で引き出されてきたように思います。

以上